
魔王の子どもになっちまつた

HERON

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の子どもになつちまつた

【Z-ONE】

Z2128F

【作者名】

HEROZ

【あらすじ】

魔王に殺された勇者が、魔王の子どもに生まれ変わってしまった話。

「ふははー、私に勝つなど無理な話。死ね！」

ちつ……終わりかよちくしょつ……仲間も死んじまつた。でつ、俺も魔王が放つた魔法を受けて死ぬつてわけだ。勇者として旅してきて、結局、無様な幕引きしちまうみてえだな……世界も救えねえ。仲間と約束した、みんな揃つて生き残ろうつて約束すら守れねえ。

……どうせ死ぬんだ。前向きに考えて死のう。あの世で仲間と余えたらいいな。そしたらまた……

「産まれました！ 産まれましたぞ魔王様！」

「むつ。や、そうかそうか！ つむ。ぬはジユニアだ！ 私に似て、いい顔つきをしている。これは将来が楽しみだ」

「J……これはじつことだ……俺は死んだんじやなかつたのか。なんで魔王が、気持ち悪いくらいの笑顔で俺を見る……それにジユニアってどういうことだ？……言葉を発しようと思つても駄目だ。うまく言葉が使えない。

「おい！ 今、ジユニアが何か喋つたぞ！ 聞いていたか？」

「はーーー。まだ、言葉にはなっておつませんが、元気がよろしいですか」

「はっはっはっ。それはそつだ。私から生まれたのだからな。ほーら、ジユニア。自分の顔をよく見てみなさい。私にソックリだらうー!？」

「どうなつてんだ!? 僕の顔が魔族の顔に……しかも、確かに魔王とよく似ている。ようやく分かつた。俺は生まれ変わったんだ。運悪こじとに世界を滅ぼすうと考へていて魔族に……

「おい。俺にまとわりついてる運命。俺が世界を救えなかつたのがそんなに不満か。よりこよつて魔族かよ。しかも、これじゃあ仲間に会えねえじやねえかよ…………」そんなこと言つても仕方ないか。こうなつたら殺すしかねえ。仮にも魔王の子どもだ。少なからず魔王の素質は遺伝されてるはず。その素質に賭けるしかねえ。とりあえず今は魔王の子どもとして生活するしかないか……

「やうじやないぞジユニア! 私……いや、パパの魔法をよくみておきなせこ」

「はい。父上」

あれから一年か。魔族つてのは成長が早いな。もうペラペラ喋れ

る。

それにしても妙だ。どうして、魔族は世界を滅ぼそうとしない……魔王なんて親バカすぎで、一日中、俺の側にいるじゃねえか……

「魔王様！ 一部の部下どもが、なぜ攻めようとしないんだと反乱を起こしております。魔王様から納得するお言葉を頂きたいのですか……」

この側近も大変だな。人間でいう大臣みたいな役割だと思うが、いくらなんでも働きすぎだろ。ストレス溜まつてただろ。多分。

「決まつておるだろ。ジュニアは未来だ。間違いない。ジュニアは将来、私を遙かに上回る魔王と成長する。馬鹿な部下どもに伝えておけ。現状よりも未来の可能性を考えてみるとな」

なんだか気に入らねえなあ。結局、魔王の親バカぶりは素質を感じたからそうなつてるだけなのか？ 駄目な子どもなじうのはなつていなかつたのだろうか。ちょっと揺さぶつてみるか。

「ねえ、父上。僕は結局、未来の魔王になるだけの存在？ 僕の存在は可能性？ 父上は僕自身は好きじゃない？」

さあ、どうでる、仮、親バカ魔王。

「なつ……何をいっているんだいジュニア。もしかしてせつきのパパの言葉に傷ついてしまったのか……ごめんなあ。本当にそんなこと思つてるわけ無いじゃないか。あれば、部下の前だからああ言つただけなんだよ。今は、部下がいないから本当のことを言おう。パパはただジュニアが大事なだけだ。もし、ジュニアにもしもの」と

があればパパは断言できる。どんな状況でもパパはジュニアを守る「

やべえ。」といつマジだ。完全に親バカじやねえか。しかも重度だ。これはいい暇つぶしになるな。魔王つてもつと冷徹な存在だとイメージしていたが……。駄目だ駄目だ。この親バカ魔王のペースにやられてどうする。俺の目的はあくまで魔王を殺すことだ。馴染んでる場合じやない。

「そうだ！ 憎いぞ。もつ、パパ以外にジュニアに勝てる者はいないんじゃないか！？ よつやくジュニアも戦えるな。期待してるぞ」

また二年が過ぎた。もう、そろそろ親バカっぷりにも慣れてきた頃だ。というか、なぜ来ない。俺以外に勇者はいないのか！？ もう四年過ぎたんだぞ。誰か魔王城に攻め込んできてもおかしくない頃だろう。魔族も大人しいんだからよ……

しかも、今はチャンスなんだ。そろそろ俺にも力がついてきたころだ。勇者達とうまく戦える自信はある。それで、俺がキリがいいところで人質にでもなれば、倒せるはずなんだ。親バカだからなこの魔王……

「魔王様！ 城の食料がそろそろ底を突きそうです。これ以上は仕方ないかと……」

本当に、この側近は大変だな。魔族嫌いだけど、なんだか同情してきた。

「丁度いい。ジュニアの力も即戦力以上の力となつた。久しぶりに村を潰すぞ」

「本当に『い』ますか！？ 久しぶりなので『気分が高まりますなあ。食料がたくさんあるといいですね』

なんだ。結局、この側近も殺すのが大好きな糞野郎かよ。同情して損した……

「どうだジュニア！ 喜ばしい光景だろ。また一つ村を占領したぞ。それにしてもどうしたんだジュニア。戦うのが嫌だなんて。まだ実戦は恐いか？」

「はい。父上……」

何が喜ばしい光景だよ。血がたくさん流れただけじゃねえか。やっぱり魔族は嫌いだ。絶対に殺してやる。

「そつか。だが、落ち込むことはない。初めての実戦などそんなも

のだ。いつか慣れる！ それにしても、パパはジュニアを産む時期を誤ったかもしれん。正直、パパはジュニアを戦わせなどしたくない。人間を滅ぼし、魔族が住みよい世界になつたときに産むべきだつたのしれんな……」

「……」

「すまないジュニア。難しい話だつたな。さあ、城へ帰ろつ

何が魔族が住みよい世界だよ。ふざけんな。ここはお前ら魔族の世界じゃねえんだよ……

「大変です……勇者一行が攻めてきました。不覚です。あのとき以来のことなので守りが手薄でした。もう……勇者一行は、魔王様の側まで……」

さりにあれから一年。ようやくきたか。待つた。このときをどれだけ待つたか。側近が死んだところを見ると、もう魔王と勇者一行の一騎打ちだな。

それにしても、最後まで大臣のようだつたなこの側近は。まあ、どうせこいつも糞野郎だつたからどうでもいいけど。さあ、来たぜ。扉が開いた。勇者一行の「」登場だ！

なんだかダサいな。全体的に勇者一行には見えん。悪党臭い雰囲気まで感じるだ……まあいい。俺は俺の考える作戦を実行するまでよ！

「よくも……よくもおー！」

「駄目だジユニアー 感情的になつては！」

おつ。ここの勇者結構やるじゃねえか。悪党臭いなんて思つてすまなかつたと心で謝つておこいつ。

……よしー つまく捕まえられた。ああ、ここからが問題だ。勇者一行の行動と魔王の行動。ここのが大事なところだ。

「ジユニアを離せ！ ここの魔弾が見えないか？」

撃つ……のか？ まざいな。やつぱり魔族なんてそんなもんか……？

「撃てよ。この肩が死んでいいならな。見たところ、ここのはお前の子どもだらう？ 自分の子どもを殺せるかい？ いや、殺せるな。お前らは肩だからな？」

煽つてるんじゃねえよ勇者！ 仲間もクスクス笑つてんじゃねえよー ヤバイ。この一行、悪党集団だ。性格悪い。

「ちつ……撃てる……撃てるわけないだらう」

おつ、流石は親バカ。何を言われても子どもは殺さないってか。

「けつ、魔王なんて楽勝だな。じゃあ、俺が言つ命令に従つてもいいおつか。さうじゃねえと……」

「痛てえ！ こいつ、俺の首を切りつけやがった。人質はもうちょっと丁寧に扱つてくれよ。まつ、これくらい悪党の方が俺からしたらラッキーかもな。躊躇ねえ。」

「分かつた。なんでもするからジユニアだけは傷つけないでくれ……」

魔王が頼み込んでるこの光景……なんだか、俺達の勇者旅はなんだつたんだって話だ。ちょっとイライラしてきた。

「情けねえなあ。こんな奴にやられた前の勇者は相当な屑だつたんだろうな」

「それは俺達のことか？ こいつらが魔王を殺した後、俺がこいつらを殺してやるうか。」

「まあ、そんなことはどうでもいいんだ。じゃあ、まずはお前から子どもを奪おうか。おい、俺に捕らえられてる魔王の子ども。俺に服従しろ。俺に従つと誓へ」

「ヤバイ。こいつらがドンドン嫌いになってきた。しかし、魔王を殺すためだ。こは堪えて……」

「早く言えよ屑が！」

「ジユニア。早く言つんだ。助かるんだぞ。ジユニア……」

「言おうとしたんだって今。本当に性格悪い野郎だな。

「僕は父上が嫌いになりました。だから僕は勇者様に従います」

「聞いたか魔王！　もう、こいつは俺の奴隸だ。お前の子どもじゃない。まあ、殺しは死ない。安心して死ね！」

「ジュニア。生きろ。パパはジュニアに楽しい思い出も残せなかつた。しかも、これから苦しい時間が流れるんだろう。嫌な気分になる。だが、未来の可能性を考えるんだ。生きていれば楽しい思い出は必ずできる。パパもジュニアと過ごした時間は最高に楽しい思い出だ……最後の最後にそれくらいしか言えないパパですまない。ジュニア……生きろ」

なんだ。やつと分かつた。この親バカ野郎。最後に俺に微笑みやがつた。死ぬつてのによ。こんな肩野郎に殺されて。肩に肩呼ばわりされて。きっとこいつは俺も殺すよ。肩だからな。

人間がなんだ魔族がなんだ。どっちもあんまり変わんねえじゃねえか。親バカがいて苦労人もいて肩もいて。こんな世界。人間のものでもなんでもない。誰の世界でもないんだ。人間はずつと人間の世界でいたいから守つてるだけだ。魔族は魔族の世界にしたいから攻めてるだけだ。どっちも自分の種族が住みよい世界にしたいだけ。

正義も悪もねえ。世界を救うも滅ぼすもねえ。ただ、自分の種族を守るだけだ。

俺は偶然にも魔族に生まれ変わつちまつた。なら俺は……

「……父上……」

遅かつた。俺の判断が遅れたからだ。色々と考えすぎた。先に体を動かすべきだった……

「おい。何すんだよ肩。抵抗しなかつたら助けてやろうと考へたのこよ。もういい。お前も死ね。肩は肩らしく一緒にあの世に行け……！」

本当によお。殺されたのがもつと納得いく勇者だったらまだ報われたのにな。まさか、こんな肩野郎に殺されて死ぬとは父上もあの世で嘆くだろう。せめて俺が生きててやんねえと……あの世での楽しみも、少しくらいは感じさせてやんねえとな！

「死ぬのはお前らだよー。肩野郎ババもー！」

けつ。死んじまつても笑つてらあ。俺が生きるのが嬉しいってか？死んでまで子どものことしか考えてない。そんな親バカ見たことねえよ。ヤバイ。泣けてきた。

安心しろ。ちゃんと俺の活躍が見えるところに埋めてやるからよ。俺だってこれから大変だからな。魔族もいないから長い時間かけて集めないといけないし、魔王としてまだまだ勉強不足だしな。

まつ、時間はかかると思うけどよ。父上の願いである魔族の住みよい世界。俺が作つてやる。まつ、気長に見ててくれな。

「産まれました！ 産まれましたぞ！」

「おお。確かに産んでみると嬉しいもんだな。よし。ジュニアだ。名前はジュニア！」

「魔王様！ 魔王様の名もジュニアでは？……」

「俺によく似て、いい顔つきしてるだろ？ だからジュニア。俺の父上がつけたのと一緒に理由だ！」

見てるか父上。ジユニア産んだぜ。確かに親バカになる気持ちも分かる。すげえ嬉しいもんだな。

それでよお。見てるから分かると思うけど、住みよい世界になつたぜ世界は。魔族一色だ。もう戦わなくていいんだ。最高だろ？これからも俺は更に住みよい世界を作つていくから楽しみに見てろよな。

父上。いつか俺が死んだときは、あの世で一緒に、ジユニアが作る最高に住みよい世界を眺めてよつぜ。最高だろ？ 父上。

（後書き）

久しぶりの短編です。

初めて一人称を使ってみました。今後、一人称も使っていきたい
ですし。

まあ、今回の短編は一人称の練習として書きましたので、情景描
写など、色々と分かりにくいところもあると思いますがご了承くだ
さいませ（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2128f/>

魔王の子どもになっちまった

2010年10月10日19時34分発行